‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

70号 1993.7.25
文・編集・発行
恋　怪子

THE STREET BEATS ★LIVE ON THE WILD SIDE '93★ SUMMER TOUR

新宿ロフト　1993.6.5

「テレビでみかけた戦争は僕らに何を教えてくれた……」この歌をきいていて視えてきたのは、テレビを見ているΦKIの姿である。テレビにうつし出されている戦争を見て、それに対する印象を書きとめているΦKIの姿である。そして、その書きとめられた言葉は、テレビや新聞などのマスメディアの中に氾濫しているものばかりで、その言葉からうかがいしれるΦKIの考えも、テレビや新聞を見て誰でもがもつようなものでしかない。しかし、これは言葉=歌詞の問題ではないだろう。歌から一個の独自な人間としてのΦKIの存在が感じられないのは、ΦKIがマスメディアという他人の目を通ったものを自分の心の眼で見ていないからだと思う。

新しい曲というのは、バンドの（この場合はΦKIの）そのときのありさまを最もよくあらわしていて説得力があることが多い。それと同時に、何回も演奏をしていくうちにできてくる、その曲自体がもつことになる「世界」がまだあいまいで、歌詞もまだまだ「素材」に近いともいえる。

この日にやった別の新しい歌「バード」の中に「きみはきみだけの歌を歌いつづければいい　僕は僕だけの歌を歌いつづけるだけ」というところがあったけれど、「テレビでみかけた戦争は……」という新しい歌がΦKIだけの歌になるにはもうすこし時間が必要なのかもしれない。

テレビでみかけた戦争は　僕らに何を教えてくれた
僕らはいまだに沈黙している　そしてまた争いがはじまった
テレビでみかけた戦争は　僕らに何を教えてくれた
世界で何がおきたって　僕らはゲームを楽しむだけ
テレビでみかけた戦争は

6/5ロフトの入口付近（ライブの前）

PHOTO BY K.K

名古屋 E.L.L. 1993.7.7

7:30PMの開演時間までまだ10分以上あるのに観客は「ビーツ、ビーツ」と声をあげはじめた。ライブは時間ぴったりにはじまった。

1曲目の「DON'T BE COOL」がはじまってすぐ、今日のライブはいい!って感じてワクワクしてきた。いちばんうれしかったのは、SEIZIのギターがゆたかになりひびいていたことだった。6月5日のロフトと、6月25日のCLUB 24で、ライブそのものも低調だったけれど、とくにギターがひどかったから。25日のときなどギターを弾くのがつらそうにみえて、そういうふうにみえたのははじめてで、心配をしていたのだ。ライブの出来、不出来はあってあたりまえ。よければうれしいし、よくなければ腹がたったりがっかりして、もうきくのやめようなどと思ったりするけれど、心配したのははじめてだった。けれどもこの日、E.L.L.でその心配は吹きとんだ。SEIZIはきっと何かを乗り越えたかふっきれたかしたのだろうと思った。力強くて、ゆたかで、うるおいのあるギターはすばらしかったし、2曲歌った歌もパワーと説得力があった。

ライブというのは、ただ音楽をきくということからはみ出すものがある。この日のように、やっている人の変化を目のあたりにすると、「人が生きていること」に立ち会っているんだって思う。

ヴォーカル、ギター、ベース、ドラムが、それぞれ意味をもってそれぞれの分を真剣にやっていると、4つの音がしっかりと重なり合って、そこにひとつの世界が出現する。この日の「突然夏の嵐のように」は滝の落下するゴーッ、ドーッという音がきこえてくるようなバキバキッというすごい演奏で、みんなシーンとしてきいていた。私はその大轟音の中で息をひそめて、演奏をしている4人の心臓の音をきいていた。

広島ウッディーストリート　1993.7.13, 7.14

7月13, 14日のウッディーストリートに行く予定でチケットを買ってあったのだが、行けなくなり、広島の栗田忠範さんにチケットをゆずってライブに行ってもらった。ライブの感想が手紙で送られてきました。

手紙もらった時、中を開けてみるとなんと13日、14日のビーツのチケットだったのでびっくりしました。その直後、元俺らのボーカルをやっとったブー（部谷直紀）に電話して、「ビーツのライブ行かんか」といったら「行く行く」といって二人でその当日になるのをうきうきしてまっていました。ライブの前日、ブーからの電話で「急用で行けんなった」ということで俺一人で行くことにしました。

ライブ当日、学校に着がえをもって行って、福山駅で着がえて、いらん荷物をコインロッカーにブチこんで、広島行きのキップとビーツのチケットと少しだけの銭を持って広島に行きました。一人で行ったので少し心細かったけどウッディーにつくと同じ共通点を持ったやつらがたくさんいました。みんなビーツが出てくるのをまち続けていたのでビーツの4人がでてくると同時にウッディーが壊れるんじゃないかというくらいのかんせいでした。数曲の新しい曲や、昔の曲とか、もうすごいとしかいいようがありませんでした。SEIZIの新曲のロスアンゼルスボーイとかICHIKWAの曲とかすごくよかったです。中でもブルーヘブンとかDON'T BE COOLとか古い曲も昔とは一味も二味もちがってきこえました。俺が思ったのは「曲は成長する」ということを一番感じました。すごい、うまい、かっこいい、と3びょうしそろっている唯一のバンドだと心から思いました。（栗田忠範）

大阪ミューズホール　1993.7.18

はじまってしばらくの間、胃のあたりに異物感があった（とまどったり、よくないんじゃないかなって思うとそうなるのだ）けれど、3曲目くらいでそれが消えてふわあっと心が上昇していった。

ピシーッという鋭い衝撃ではなくて、ズーン、ズーンと重いゆっくりとした衝撃がきて、その重さがどんどん増して、私はその場所に根がはえたようになった。名古屋のE.L.L.（7月7日）もそうだったけれど、ギターがなにしろなりひびいていてすばらしかった。ΦKIもとってもおちついた感じでかっこよかった。喉の調子がよくないのか、声が出にくいように思えたり、かすれてきこえたりするところもあったけれど、それもまたいいっていえるくらいだった。客席の前半分以上がとびはねる人たちで、ダイビングもしょっちゅう。だけどライブハウスのスタッフの人たちがちゃんと対応をしているから（たいていのライブハウスではダイビングをすると野良犬でも追い払うような態度をとる）、うしろから見たかぎりでは、みんな楽しそうだった。

みんなで手をつないでなかよくするのではなく、ひとりひとりがそれぞれストリート・ビーツの音楽と手をつないでいる。演奏する側は演奏することに徹し、きく側はきくことに徹し安易ななれあいを求めないと、この日のような楽しい、あたたかい、自由なライブになる。

アンコールは2回あって、1回目が「風の街の天使」と「星降る夜に」（秀逸だった!!）。ライブの最後の曲は「I WAS BORN IN HIROSHIMA」だったが、これは多分、アンコールのはじめにだれか男の子が「ヒロシマやれ―っ」って叫んでいたのをききとどけたのだと思ってうれしかった。

演奏が終ってもステージから去り難いといった様子をしていたΦKIは実に印象的だった。

帰り道、「サンクチュアリ」の中の「鍵を閉じないで　まだ見ぬ友よ」という歌詞が何度も何度も心にうかんできた。

ストリート・ビーツには、ΦKIには鍵を閉じないよ。
そして、ずーっとずーっとまだ見ぬ友でいるよ。

7/18ミューズホールの入口付近（ライブのあと）

PHOTO BY K.K